

# からこかぎ

第15号 平成28年9月16日(金)発行

唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会

〒636-0247 奈良県磯城郡田原本町阪手233-1 唐古・鍵考古学ミュージアム内

TEL 090-9257-3688 Email: karakokagijimukyoku@swan.ocn.ne.jp

## 雑 感—神奈川県津久井やまゆり園事件

今西 和代

### 1 ネアンデルタールのお墓

私の好きなお話に、ネアンデルタール人(2万数千年前に絶滅したヒト属)のお墓の話があります。イラン北部のシャニダール洞窟遺跡の4号址(幼児人骨)の周囲の土壌から大量の花粉が検出されました。その花粉分析から、白・青・ピンク色の色鮮やかな草花であったということが分かりました。そのことから、当時のネアンデルタール人は、死者を悼む心を持ち、遺体に花を供え埋葬し、日常的に花を手向けていたことが窺えます。

### 2 1号人骨

同じシャニダール洞窟遺跡から高齢の男性人骨(1号人骨)が発見されています。その人骨は、多くの外傷を負っており、左目視力は打撃により失っていました。右腕は数箇所にもわたり骨折し、さらに下腕を無くしていました。また負傷は右半身に麻痺をもたらし、下肢と足が変形した結果、歩行は困難になり痛みを伴ったと推測されています。

特筆すべきは、これらの傷跡が広範な治癒の痕跡を示している点です。彼の属していた集団は、傷害を負った人を治療し、長らく集団の中で気遣った生活をおくったと思われています。

### 3 入江貝塚

私が訪れたい遺跡に北海道西南部の洞爺湖町にある「入江貝塚遺跡」があります。遺跡からは、竪穴住居や墓域などが検出されて縄文時代前期から後期まで拠点的な集落が営まれていたこと

が明らかになっています。そこでは、15体の人骨が出土して、そのうちの縄文後期の「9号人骨」は、20歳近くの女性の人骨でしたが、四肢の成長がみられませんでした。調査の結果、その女性は、幼児期にポリオ(小児麻痺)に罹っていたことが分かりました。

縄文後期の冷涼な時期に現在よりも困難な生活が予想される北海道の地で、長期間にわたり集団の構成員が障害を持った家族を思いやる生活をおくっていたということがわかります。若くして亡くなった女性を思うとやるせない気がし、その人を支えた人たちの気持を思うと胸が痛みます。

### 4 津久井やまゆり園事件

ネアンデルタール人は、現生人類に比べ脳容量が大きい一方、口や喉の構造(気道が短い)から言葉は話せなかったという研究報告があります。そのような条件下でも先ほどのとおり、人を思いやる心はもち続けたと思われれます。一方、縄文時代には、ポリオに罹った人骨の出土例が数点報告されており、入江人骨の例は、当時としては例外的なことではなかったと思えます。

津久井やまゆり園事件は、戦後最大の殺傷事件との報道がありました。13000年続いた縄文時代の殺傷人骨は10例にも満たないといった報告もあり、被害に遭われた方の数に驚かされます。

でも、被害者のご両親が「日本一の息子です。」と涙ながらに語られている姿をテレビで拝見し、また一生懸命介護にあたっていた施設やそれを取り巻く津久井町の人々の温かいまなざしを報道でみるとホッとしました。

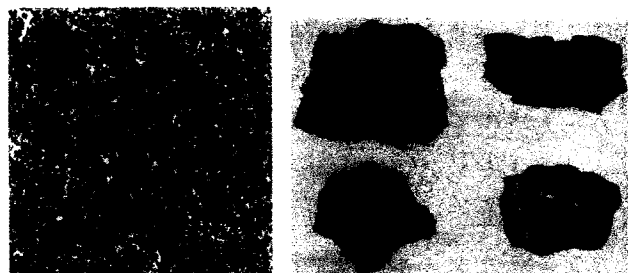
明日からリオ・パラリンピックが始まります。また、寝不足の生活が始まります

## 遺物紹介 (11) 一炭化米

### 会報編集メンバー

1 今回は、第1室「弥生の食」のコーナーに展示されている第20次調査(昭和59年度)で出土した炭化米を紹介します。炭化米は、コメが被熱その他の原因により炭化したものです。

第20次調査は、宅地造成工事に伴う調査(調査面積150㎡)で、弥生前期と中・後期～中世の2面の遺構面が検出されています。調査地は、遺跡西エリアの第8次・22次調査の南側に位置し、国道24号線を挟んで西には近接した距離に第11次・14次調査地があります。周辺の調査区は、遺跡の微高地に相当し、弥生前期の遺構・遺物が集中して検出されています。



左 炭化米・右 焼土塊と粃圧痕を有する焼土塊  
(第20次唐古・鍵遺跡調査概報)

2 炭化米は、調査地南側の弥生前期段階の方形土坑(SK-215)からの出土で(長軸2m以上、短軸2m以上、深さ1.3m)の中層から出土し、炭化米のほか炭化粃、焼土塊(スサ(藁)を含んでいたことから「壁土」と報告されています。)が一括投棄された状態で出土しています。下層から竪斧柄未製品2点と柱材1点が出土していることから、当初は貯木ピット(木器貯蔵穴)として機能し、その後に廃棄坑として利用されたと推定されています。土坑の埋没は、前期後半とされています。炭化米といえば、稲作の根拠となるのみならず稲作の伝来ルートの解明や生産力の評価に活用されます。

報告書では、「炭化粃と焼土塊が特に多く」とされているのみで、具体的な炭化米の量は不明です。唐古・鍵遺跡では、第1次調査の101号竪穴(前期土坑)の「180以上に達する量塊」が

知られています。コメの大量出土例は、北部九州を中心として、13例(100以上)ほどが報告されていますが、弥生後期がほとんどで前期の例は、唯一唐古・鍵遺跡のみです。

かつては、弥生前期のコメの生産性を高く評価する意見が大勢でした。しかし、最近では、縄文時代からの生業の継続性に着目する見解が有力となっています。同じ調査地北側の大型土坑(井戸)から雑穀類が付着した広口長頸壺(弥生中期)が出土し、さらに隣接する11次調査のドングリピットの検出はそれを裏付けています。

3 2001年に大阪府和泉市(当時)が実施した炭化米のDNA検査(佐藤洋一郎教授分析)によりますと、池上曾根遺跡や唐古・鍵遺跡の炭化米から温帯ジャポニカとともに熱帯ジャポニカが検出されています。炭化米のDNA分析という点、滋賀県守山市下之郷遺跡の弥生中期中頃～後半の環濠や井戸跡の調査で大量の炭化米がみつき、その割合が熱帯ジャポニカ(40%)と温帯ジャポニカ(20%)不明(40%)がよく知られています。熱帯ジャポニカは、収穫量は温帯ジャポニカに比べ少ないのですが、雑草に負けないほど強く、手がかからないのが特徴です。また、畠作にも適合し、縄文稲作を想定する意見も根強いです。近年は、菜畑遺跡(佐賀県唐津市)、妻木晩田遺跡(鳥取県淀江町)、登呂遺跡(静岡県静岡市)など多くの遺跡で検出されています。

さらに、唐古・鍵遺跡や池上曾根遺跡から出土した炭化米のDNA分析の結果、朝鮮半島にない中国固有のDNA品種が混ざっていることが判明しました。伝来ルートは、朝鮮半島南部経由、中国長江下流域・江南地方からの直接伝播、南西諸島伝いなどの3ルートが考えられています。遺伝子タイプの一一致した炭化米が温帯ジャポニカであったことより大陸直接伝来ルートの根拠となりました。しかし、環濠を中心とした集落構造や支石墓、農耕祭祀、さらには木製農具、大陸系磨製石器などの考古資料(文化要素)が半島南部と類似していますので伝来ルートは半島南部で揺ぎ無いものと思われま

## 第17回弥生ウォークのご案内

### —初期水田址の視点—

井上 知章

「考古学は、人間の活動痕跡(遺跡、遺構、遺物)やそれらの存する空間を研究対象とする。そして、各地域・時代の文化、社会、生業、技術、思想、自然社会環境などの文化要素を個々に復元し、それらを一連の空間・時間的に配列し「人間の歴史」を構築するのを目的とする。」

(酒井龍一「セトルメントアーケオロジー」8P)

第17回の弥生ウォークは、残暑を避けボランティア室で、「稲作文化」の復元を目的に初期の水田址を確認したいと考えています。前回のウォークは、近畿の代表的な水田遺構の残る生駒山西麓の「池島・福万寺遺跡」を尋ねましたので参考にしたいと思います。

内容は、当日に譲るとして、方法論を中心にご案内します。これは、個人差があり、正解というものはありません。これは、普段考古資料を整理するためにあらかじめ用意している私の「分類ポケット」というようなものです。

まず、稲作文化には、ご承知のとおり多くの構成文化要素(考古資料)がありますが、私は大きく3つに分類しています。最初に確認するのは、稲作を直接的に裏付ける考古資料です。水田状遺構、花粉などの植物遺存体、イネのDNA分析資料、籾痕をもつ土器、炭化米・農具などの出土資料、C14年代測定資料などが相当します。これらにより稲作の確認や時期の特定などを行います。

二つは、それらを支える技術に関わる考古資料です。普段から、「ものづくり教室」で実験考古学的検討を会員相互でおこなっている分野です。農耕具やそれを制作する石器類やさらには水田や灌漑水路などに表れている水田耕作の技術です。これらの検討により、農耕技術、農耕具、水田面積や灌漑施設、地理条件の特定などがで

きます。

最後に、稲作の反射的効果ともいえるべき集落(社会)の生活・文化の変化に関わる考古資料です。土器様式、集落の位置、家族関係や階層分化などの集落構造、墓制、農耕儀礼などを示す考古資料です。特に、集落構造の変化に関わる社会的要素、リーダーの出現といった政治的要素さらには農耕祭祀などに現れる精神性を表す考古資料などを特に気にかけています。

これらの三つの考古資料(文化要素)が、相互に関連して農耕社会を構築しています。

従前の考古学は、これらの個別の考古事実(考古資料)の説明を中心として行なわれていました。しかし、50年ほど前から、「社会の変容」の解明に力点が向けられています。冒頭の引用文のとおりこれらの個別の考古資料からそれらを一連の空間・時間的に配列し「文化」をモデル化することを志向しています。

ご承知のとおり、先ほど例示した三つの文化要素を充足している遺跡は数が少ないです。そこで、いくつかの考古資料を抽出し、評価し、遺跡の農耕集落モデルを導くこととなります。その際、これらの考古資料を総合的に評価(全体論的に整理する)することに留意しています。そして、そこでの評価の中心となるのは、考古資料の「推移」(=時間的、空間的变化)と考えています。

前回の弥生ウォークは、二つのところに着目しました。一つは、遺跡の地理的条件(生駒西麓の扇状地、沖積地の遺跡の移動)と、一つは水田・灌漑施設の推移を根拠に集落域の特定とリーダー層の出現といった仮説に着目しました。

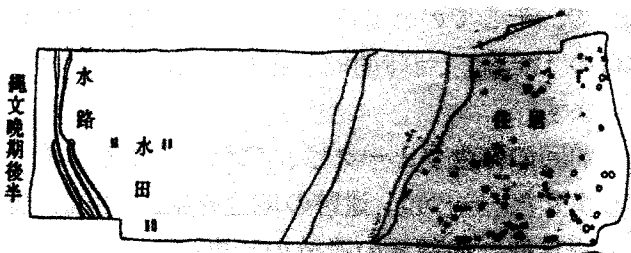
今回は、菜畑遺跡、板付遺跡などの北部九州の初期水田址と弥生ウォークで訪れた中西遺跡、秋津遺跡、萩之本遺跡などの奈良盆地の初期水田址そして唐古・鍵遺跡の周辺の平等坊・岩室遺跡、阪手東遺跡の水田址などを確認し、その異同を考えたいと計画しています。2時間という限られた時間ですが、秋以降の弥生ウォークにつながる論議ができればありがたいです。

## 遺跡紹介

### 菜畑遺跡—国内最古の水田址

#### 1 位置等

菜畑遺跡は、佐賀県唐津市(唐に渡る港の意)の西南部にあり、唐津湾より1kmの丘陵の先端に位置しています。遺跡調査は、昭和55～56年に実施され、丘陵端部から谷を横切るように幅14m長さ50mの調査地(下図)で、標高は縄文晩期の基盤面は4.5～2mです。遺跡は、縄文前期～中期、晩期～弥生中期・奈良時代におよぶ複合遺跡です。縄文前期～中期は、丘陵端部幅75mの北側に墓域を形成し丘陵南端から南斜面に貝塚が検出されています。また、縄文晩期後半(弥生早期)からの地層面は、晩期終末(弥生早期)、弥生前期初頭、前期中頃～後半、弥生中期までの5期にわたって順次堆積しており、北側の丘陵部分に集落域、南側には斜面を利用した生産域(水田)が各層から検出されています。特に、遺跡を有名にしたのは、縄文晩期後半(弥生早期)の地層(9～12層)で検出された最古の水田址です。以下、凸帯文土器期(山ノ寺式)の最古の水田址を中心に説明します。



#### 2 水田址

一般に、水稻稲作を裏付ける資料は、水田址、農具、炭化米の出土があげられます。残念ながら唐古・鍵遺跡は水田が検出されていませんが、縄文晩期後半(弥生早期)の菜畑遺跡からはすべて見つかっています。南側の低地部からは、水路(縄文晩期中ごろの土器も出土)と畦を伴った水田遺構と、丘陵裾部に平行した土留用の矢板(6)・クイ列(5)が検出されています。水田遺構は、調査区東南側にあり、水路の南北に平行

して南北4m長さ7mの4面の水田が土盛の畦畔で仕切られています。農具は、石包丁(2)、鋳状木製品(1)が出土しており、炭化米も250粒ほど出土しています。なお、そのうち、1割程度がシイナ(未熟米)であったとのことで、コメの生産性は高くなかったと推測されます。

問題は、年代の特定です。土器編年でみますと、福岡市板付遺跡最下層の水田に共伴した「夜白1式土器」よりも1年代古い「山ノ寺式土器」が出土しており、凸帯文期の最古の水田遺構と評価されています。また、甕底部の内面付着炭化物の炭素14年代測定法の結果は、紀元前930年を中心として10世紀後半から9世紀末の値を示しています。佐原真先生は、縄文の狩猟採集生活から稲作を中心とした弥生時代への画期をこの時期に求め、「弥生早期」と整理しています。(九州の研究者の多くは、「文化」でなく「土器」に着目し縄文晩期と整理しています。調査報告書も同様な記述です。)

#### 3 半島の水稲稲作の伝来

最近、朝鮮半島の発掘調査が進み、半島南部ではBC15世紀には中国北部から畠作を行う人々が南下し、BC13世紀には本格的な畠作が行われ、BC11世紀には稲作が開始され環濠を伴った農耕集落が形成されたことが判明してきました。半島南部の水田稲作の特徴は、水田稲作と畠作(アワ・キビ・オオムギ・コムギ・マメ類)が並存し、畠作が主体であったところです。また、その遺構は、灌漑用水路を持ち小規模河川から水をひき、丘陵緩斜面の末端に位置し、小区画水田と階段式水田(韓国独自の方式)といった特徴を持っています。

菜畑遺跡の最古の水田遺構からは、土器の他に、有溝式石包丁・扁平片刃石斧・蛤刃石斧・磨製石鏃などの石器、木製農耕具、漁具、装身具その他動物の骨や植物の種子などの自然遺物も多く確認されています。とりわけ注目したいのは、炭化米とともにアワ、オオムギといった雑穀類やアズキといったマメ類が検出され、畠作農耕の痕跡を示している点です。近畿地方で

は、畠作遺構の検出例が極めて少なく、大阪府瓜破遺跡に見られるように弥生後期に限られていました。しかし、三重県松阪市筋違遺跡（平成13年本調査）からは、前期の水田址とともに幹線水路と枝線水路を利用した畝状遺構が検出され、ザクロソウ（畑雑草）や様々な植物破片が検出されています。

一方、菜畑遺跡は、既述のとおり、小区画水田です。それは、中西遺跡をはじめとする奈良盆地の初期水田址と類似しています。

因みに、「小区画水田」が多く見られるのは、限られた労働力や土地の傾斜などの地形に起因するという見解がありますが、透水係数の大きい火山灰質や花崗岩質といった土壌条件下で水

をためる（湛水）ためには小区画であることが必要であったという土壌学の立場からの見解もあります。

#### 4 奈良盆地の生活

紀元前11世紀には、記述のとおり蔚山市玉峴遺跡には小区画水田が営まれており、10世紀後半には菜畑遺跡をはじめいくつかの北部九州の遺跡で水田経営が確認されています。一方、奈良盆地には、中西遺跡などの初期水田址は紀元前5世紀とC14の年代測定法では測定されています。その間は、凸帯文土器を使用し採集を中心とした生活をおくり、東日本の縄文文化の影響のもと定住化を志向し始めた時期だと思われます。

## 第16回 弥生ウォークに参加して

### —池島・福万寺遺跡と周辺弥生遺跡— 宮川 真由美

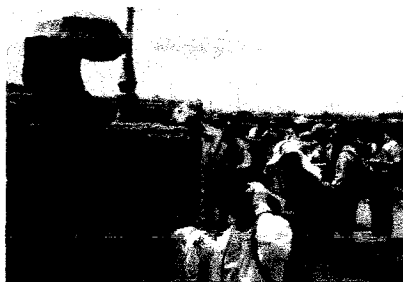
#### 1 はじめに

7月2日(土)に開催された第16回の弥生ウォークは、夏の太陽が照りつける中、4名の新規会員を加え16名で恩智川を上り、生駒丘陵沿いの弥生集落を訪ねました。

弥生ウォークの長所は、各地で行われている現地説明会と異なり弥生遺跡を「点から線」でみるができることだと思っています。点を線で繋ぐために、いつも、事前に訪れる弥生遺跡に共通するテーマの説明があります。今回は、前回と同様に生駒西麓の後期の弥生遺跡の動向と、池島・福万寺遺跡の生産域を中心にその集落遺跡を確認するということでした。

#### 2 後期の遺跡数の増加

集合駅の東花園駅を後にして、まずは恩智川沿いを池島・福万寺遺跡を目指して歩きました。道中、「扇状地」と今回対象となっている「三角州」の地形の違いを確認しました。今回訪れる後期弥生遺跡は、低丘陵地や扇状地形を中心に増加していることを大阪平野と奈良盆地の遺跡



増減表をもとに説明がありました。今回の恩智川右岸の傍に点在している上六万寺遺跡、船山遺跡、段上遺跡は、標高20~30m程度で、前回訪れた後期集落の鬼塚遺跡、皿塚遺跡、縄手遺跡と同じ標高にあり、後期段階では集落の増加傾向を示していることが分かりました。この原因を、河内潟の水位の上昇という環境面の変化に求める見方が有力であるとのことでした。

途中、岩滝山遺跡と花岡山遺跡を遠望し、前回訪問した山畑遺跡→岩滝山遺跡→花岡山遺跡といった地域の高地性集落の変遷を確認しました。それらの集落の時期は、「倭国大乱」の時期と異なることから高地性集落を「防御」機能という視点でなく、金属器が多く出土することから「流通」という視点で捉える見解が有力となっているとの説明がありました。近畿の最古の鉄剣が出土した有鼻遺跡(200mの丘陵・三田盆地西北端)も高地性の集落であったとの説明に

納得しました。今回のウォークで河内の高地性集落を確認できたので、改めて、弥生時代の高地性集落を考えてみたいと思いました。

### 3 生産域

歩きはじめて30分ほどで、自然堤防上に立地している池島・福万寺遺跡に着きました。地形的には、今までの恩地川沿いにあった扇状地形と異なり三角州（デルタ地帯）に属しているとのことでした。なかなか、現在の地形では分かりませんが、東に見える生駒山が思いのほか近いと感じました。遺跡は、生駒山からの河川（洪水）堆積物により、前期中頃の水田址から後期後半までの6時期の水田址（生産域）の推移が説明図面により確認できました。説明の最後に、発掘報告書では、水田址の推移を集落のリーダー層の出現と関連付けて記載されているとの紹介がありました。それにつき、生産システムから社会・政治システムをみる全体論的検討と評価できる一方、社会・政治システムの推移を裏付ける考古資料が不在との指摘（説明者）は参考になりました。

集落域は、池島Ⅱ地区の一部に若干検出されている程度で、当該生産域を経営する集落はどこにあるか興味が俄然わきました。近畿地方では2番目に古い鉄剣が出土した大竹西遺跡の生産域を確認し、再び生駒西麓扇状地にある弥生遺跡に向かいました。

### 4 後期の集落遺構群

扇状地と沖積地を分岐する東高野街道を越えて再び扇状地形の楽音寺遺跡、西の口遺跡、太田川遺跡そしてしおんじ山古墳学習館で昼食後水越遺跡に至りました。水越遺跡を除きいずれも、矢張り、後期から晩期の弥生遺跡でした。明確に、墓域と集落域が識別できるのは最後に訪れた水越遺跡だけでした。その眼前には、大竹西遺跡、池島・福万寺遺跡があり、水越遺跡の範囲（東西1.25km、南北1.2km）は、大竹西遺跡・太田川遺跡東北方向に広がり、意外

にも麓の沖積地形に隣接していました。そこで、水越遺跡の生産域は、西（池島・福万寺遺跡方向）に広がる可能性が高いという説明がありました。時期的には、前期～後期に継続する遺跡ですので、両遺跡は同時存在の可能性はあるとしても広範囲の生産域と水越遺跡の墓域・集落の規模はかけ離れていて疑問に思いました。

帰りの電車の中で、資料を読んでいましたら弥生の老朽化水田の説明が載っていました。水田土壌中の鉄・マンガンの欠乏による「枯穂病」が発生し、水田を順次放棄移動するという内容でした。その結果、水田の数及び範囲は増加することになり、水田の規模と集落規模はかけ離れているとの考えでした。弥生時代の水田経営に関わる重要な視点ですので、改めて次回はその点を確認したいと思いました。

梅雨とは思えないカンカン照りの暑く厳しいウォークでしたが無事に終わりほっとしました。次の弥生ウォークは、生駒山西麓の弥生遺跡の最終回ということで、楽しみです。

### 訃 報

竹村 正幹さん（運営委員）

がご逝去されました。

謹んで、ご冥福をお祈り申し上げます。

### （編集後記）

竹村さんが急逝されて3ヵ月が経ちました。温かいお人柄で長年やさしく接していただきました。竹村さんは、ペン画がお得意で「ペン画教室」も開講していただきました。会報のロゴマークは、竹村さんのペン画を使用しています。

また、学校支援の土器作り、勾玉づくりがお得意で、多くの子供たちに慕われました。

竹村さん、ありがとうございます。

（編集委員）井上知章 植田洋高 大森初美  
谷口敬子 花坂志郎 宮川真由美 福島道昭